

歴史を知ること、それは町の誇りにもつながる

# 城の復元に賭ける ふたつの城下町の挑戦

栃木県宇都宮市、佐賀県佐賀市は城址公園を中心に広がる城下町だ。今、このふたつの町では、城の一部復元という事業が進行している。膨大な総工費を投入しての一大プロジェクト。そこにはわが町に暮らす誇りの復活と、観光資源への期待が込められている。

わが町はどんな町？

初めの一步は歴史を知ること

まず宇都宮城の場合は、現在ある城址公園「御本丸公園」を

拡張し、堀と土塁の一部、そして土塁の上に建つ「清明台」と「富士見櫓」のふたつの櫓を復元する。徳川家康の重臣、本多正純が城主となり、元和5年（1

619）に大改造したと伝えられる。宇都宮城は、北関東の要衝。將軍が日光に参詣するときに宿泊した城でもあり、かつては4<sup>キロ</sup>四方におよぶ広大な敷地を持っていたという。

一方、佐賀城で復

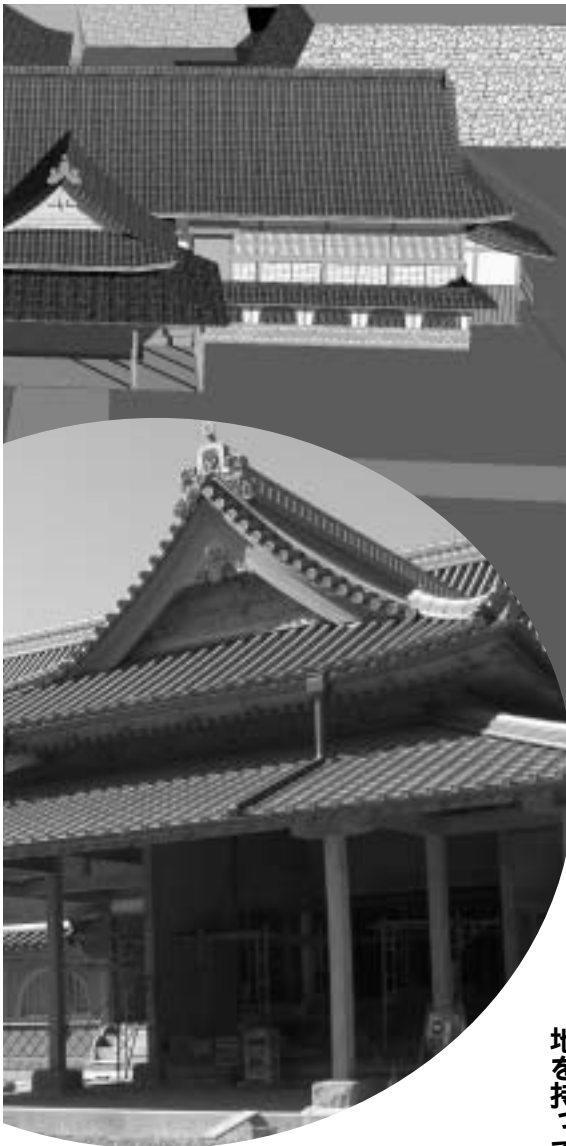
元されるのは城主の住居であり、政治を司っていた本丸御殿。鍋島勝茂によって佐賀城が築城されたのは慶長16年（1611）だが、復元されるのは天保9年（1838）に新築された本丸。何と明

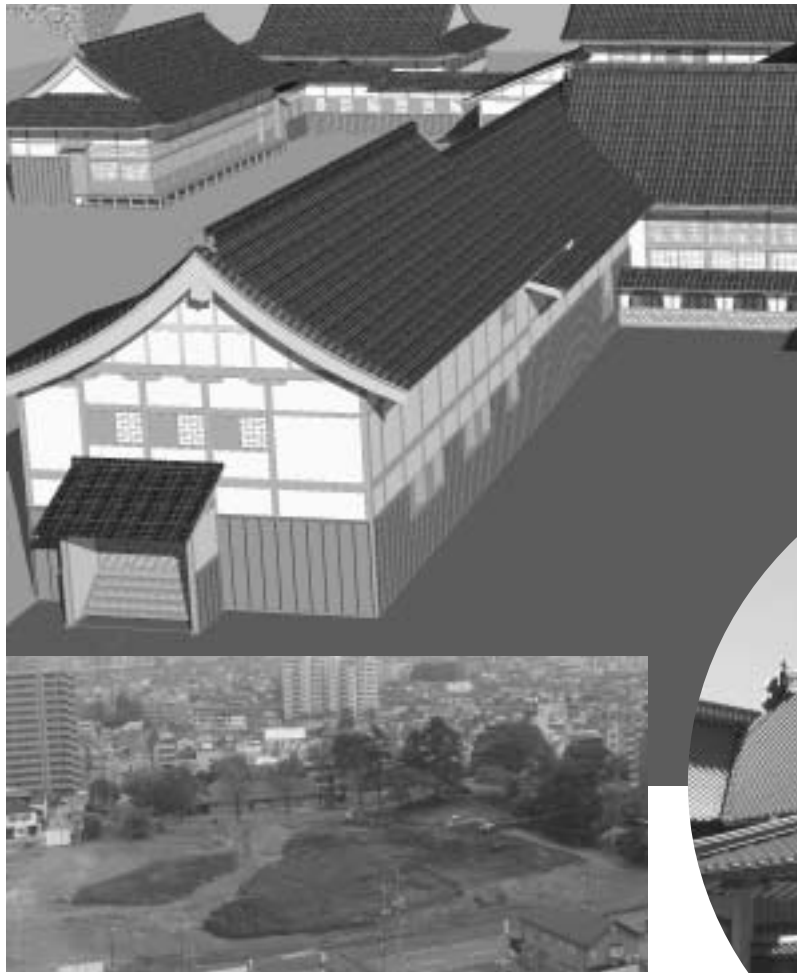
治初期まで佐賀県庁や裁判所として使用されていたそうだ。

本丸御殿が完成するのは平成15年、宇都宮城は平成18年の予定。復元構想が持ち上がったのは、いずれも20年ほど前のこと。

「町の中心部に城址公園はあっても、かつての宇都宮城はどんなものだったのか、どんな役割を担っていたのか。城を復元することが、宇都宮の歴史を市民に知ってもらうきっかけになると思います」と、宇都宮市役所公園緑地課の水沼志雄さん。

「佐賀城の場合もしかり」と、佐賀県文化課の川久保弘二朗さん。いずれも町の歴史を知ること、





それはその町に暮らすことの誇りにもつながっていく、というのが復元の理由。

### 観光資源への活用が今後の課題

復元にあたっていちばん苦勞したのは当時の絵図や間取り図などの資料・文献の収集である。「宇都宮城の復元のために参考にした資料は200点以上です。」

市内県内だけでなく、国や他県で所有されていたものもひとつひとつ集めてきました」

佐賀の本丸御殿の場合は明治初期まで現存していたこともあり、当時の写真が大きな手掛かりになったという。発掘調査のデータとこれらの資料・文献から忠実に設計図をおこしたが、次なるハードルは部材の調達と職人の確保である。県産材だけ

ではまかない切れないため、宇都宮では青森や山陰地方などから、佐賀では福島、高知、島根、岐阜などから材を集めてきた。そして実際の建設にあたっては、宮大工の技は不可欠。佐賀では京都の宮大工に依頼。宇都宮では現在、検討中だ。

総事業費は宇都宮市で約36億円、佐賀は約33億円。佐賀の本丸御殿の内部は展示スペースとなり、歴史資料館として一般に公開される。

「佐賀藩は明治維新に大きく貢献した藩です。ですから、展示は幕末から明治維新にかけての歴史を分かりやすく紹介した内容にしていきたい」と。

宇都宮城も土塁の内部を展示スペースにする計画があるという。いずれも市内の中心地、一等地にあり、観光資源としてどう活かしていくかを検討中。

はやくも宇都宮市の観光課では城の復元に先立ち、今夏から秋にかけて、東京を起点とする1泊2日のバスツアーを企画し、すでに計13回も実施し好評とか。

「1日目は市内、2日目は益子や

茂木へというコースでした。市内観光では地元の人が観光ガイドボランティアとして活躍しました。2年前には市内の史跡を書き込んだマップも制作し、市民に配っています。城の復元を受けて、市内の観光資源を掘り起こしていきたいですね」

住民参加による都市のテーマ型観光を模索しはじめているのだ。ちなみに宇都宮の現在の観光人口は年間で約400万人、佐賀は約330万人。はたして、城の復元によって、新しい観光ビジネスが生まれるか。注目されるどころだ。

### 国内にある城、城址公園は2万5000以上!?

この数字に驚く人もいることだろう。しかしこれはあくまでも推定。城を復元する場合、史跡が国や県の史跡記念物に指定されている場合は文化庁の許可が必要となる。しかし、それ以外はあえて許可は必要ない。そこで世の中にはトンデモない城が出現するというワケだ。文化庁では平成4年に復元検討委員会(略称)を設け、建築や考古学、造園、文献等の専門家が参加することによって、より忠実な復元事業が進められるよう体制を整えている。当委員会設立後に復元された城は20あまりといわれている。